



日本初!〈社会組織〉〈コミュニティデザイン〉〈グローバル・リスクガバナンス〉3つの分野を学べる大学院

立教大学大学院 21世紀社会デザイン研究科



Social Designer 33

座談会

21世紀社会デザイン研究科をデザインする —「これまで」の振り返りと、「これから」に向けたメッセージ

本年度は、研究科設立より20周年であるとともに、研究科を初期から支えてきた萩原教授・中村教授が定年退職予定という、まさに節目のタイミングとなった。今号では、20周年を記念した、本研究科の専任教員による座談会の模様をお届けする。



萩原 なつ子 教授・研究科委員長
(はぎわら なつこ)

認定特定非営利活動法人日本NPOセンター代表理事。お茶の水女子大学大学院修了。博士(学術)。(財)トヨタ財団アソシエイト・プログラマティサー、東横学園女子短期大学助教授、宮城県環境生活部次長、武藏工業大学助教授(現東京都市大学)等を経て、現職。文部科学省中央教育審議会委員、内閣府休眠預金等活用審議会委員、経済産業省産業構造審議会臨時委員等を務める。専門は環境社会学、ジェンダー論、消費者教育、非営利活動論。東京都豊島区で子育て世代や働く若い女性の視点でまちづくりの政策提言を行った「しまF1会議」の座長を務めた。



中村 陽一 教授
(なかむら よういち)

一橋大学社会学部卒業後、編集者、消費社会研究センター代表、東京大学客員助教授、都留文科大学教授等を経て現職。21世紀社会デザイン研究科委員長(2010年度~11年度、14年度~17年度)、独立研究科運営部長(2010年度~11年度、16年度~17年度)、社会デザイン研究所所長(2010年度~現在)を歴任。現場と往復しつつ市民活動・NPO・NGO・ソーシャルビジネスの実践的研究、基盤整備、政策提言に40年弱取り組む。ニッポン放送「もしやべりラボ~しあわせ Social Design! パーナリティ』『新しい空間と社会のデザインがわかるビルディングタイプ学入門』等編著・共著多数。

長 有紀枝 教授
(おさ ゆきえ)

立教大学副総長。専門はジェンダーリサーチ、移行期正義、人間の安全保障、国際人道法など。

長坂 俊成 教授
(ながさか としなり)

専門はリスク学・防災危機管理。

大熊 玄 准教授
(おおくま げん)

専門は哲学、宗教学、日本思想。

司会／
中森 弘樹 助教
(なかもり ひろき)

波乱万丈だった船出

司会／それでは座談会を始めさせていただきます。今年度は、研究科の設立から20年という節目に当たります。そこで、本年度で退職される中村先生と萩原先生を中心に、これまでの研究科についてのエピソードをお聞かせいただけないでしょうか。その後で、研究科の「これから」に向けて、先生方よりメッセージをいただければと考えております。

中村／座談会ということで、久しぶりに、研究科の発足当初の資料を見てみて、「ああ、そうか、そうだったな」と思い出したりしています。私自身が関わりだしたのは、多分1999年くらいだったかなと思うんですよね。設立の2、3年前ですけれども。

社会デザインという領域が、その当時はまだ耳慣れない新しい分野で、「それ一体、何するの?」な時代ですから。「ファッションデザイナーとかインテリアデザイナーを育てるんですか」とよく聞かれました。それが当時の二大質問のうちの一つだったんですね。ですから、研究科をつくる際の理念的なところから決める必要がありました。理念ですが、立教大学がミッションスクールであることも

踏まえて、やはりミッションをきちんと立てるということが大事でした。『人権意識に裏付けられた真に共生的な社会を創成するためには必要な理念と知識と技術の明確化』、『そして、こうした理念と知識と技術の習得』を掲げてのスタートでしたね。

授業も、いま見てみると、コミュニケーション学科目が15科目、グローバル・リスクガバナンス学科目(当時は危機管理学)が15科目、それから社会組織理論科目が10科目で計40科目、加えて、社会デザイン学の科目が5個だったので、合計45科目でした。そのうち休講しているものもあったりしたので、本当に少ない状態でスタートしたんですね。ですから、各曜日の夜に、二つか三つぐらい授業があるという感じで、とても今のように授業がパッティングして、どれを取るか迷うみたいな状況ではなかったのです。院生からは、「取る科目ないですよ、先生」と、随分言われました。

当初は、授業数も少なく、立教大学の中での位置付けもいまひとつふらふらしていたこともあって、実は、1期2期の院生たちと研究科・大学との間で色々な交渉が行われたという経緯もありました。そのようなカオスな中での船出でしたけど、やっぱり、志のある院生とともに作るということを最初から打ち出していたのが良くて、次第

に、「もうこれは自分たちが一緒に作っていくしかないな」というふうに院生も思ってくれたのでしょう。

足固めから、指導体制の確立まで

司会／ありがとうございます。設立当初の大変だった様子が改めてよく分かりました。時系列的には、その後、萩原先生がいらっしゃったわけですね。

萩原／私は2006年なので、設立から5年目ですね。

長／もともと先生方お二人はお知り合いでいらしたんですね。

中村／そうですね。乳飲み子を抱えて奮闘していらした時代の萩原先生を、何度もお見かけしていました。当時、まだ本研究科は、専任・特任教員が男性ばかりという状態で……

萩原／21世紀社会デザイン研究科なのに、21世紀もまた男性だけでやるのですか、と。そうした状況から、女性の先生が必要だという流れになっていたらしいです。私自身が、トヨタ財団で、全国の地域活動を支援する立場のプログラムをさせていただいており、研究者としても、当時すでに、武藏工業大学で大学教員をしていて、その後、2006年から本研究科に着任しました。ですから、研究科設立当初の大変な状態が、少し落ち着いてきたころに、入ってきたという感じです。

ただ、やっぱり学生が社会人ということもあり、しかも、社会学や他の分野で論文を書いた経験のある人は本当に少なかった。ですから、その作法やノウハウをしっかり伝授しながら、なおかつ「学生が何をしたいのか、何を書きたいのか」を汲み取ってゆく必要がありました。そうした指導は、けっこう大変でしたが、研究テーマが多様でわくわく感も半端なくありました。

授業内容は、私自身が21世紀社会デザイン研究科のカラーに徐々に染まりつつも、私の得意分野だった環境やジェンダーを、分野として取り入れていただきましたなどしました。当時は、研究科全体がまだまだカリキュラム作りの時期だったので、自由度は高かったですね。これから社会を作っていく上で、非常に重要な役割を果たしていく研究科になるだろうと予感しながら、学生たちとの関係性を築いていった次第です。

その後、私が研究科委員長になった頃に、社会調査の方法とか論文の書き方とか、そういうものをしっかりと教えてくださる方が必要ですねという流れになり、助教を採用するようになりました。さらに、先生方がサバティカル（研究休暇）をきちんと取れるようになります……。こんな感じで、研究科としての足固めをしつつ、しっかりと指導するために必要な授業・体制を徐々に整備してゆきました。その間に、長先生も入ってきて下さって。

和やかで、かつ学際的な雰囲気を引き継ぐ

司会／時系列的には、次に着任されたのが長先生で、研究科設立から8年目の2009年ですね。

長／萩原先生と中村先生が大変な思いをされたにもかかわらず、お二人の先生は、「自分たちがそ�だったからあなたには同じ経験



中村 陽一 教授

をさせたくない」という形で私に接して下さったんです。それって、なかなかできないことだと思うんですね。私は中村先生と萩原先生から、もちろん研究科の色々なことも学んできましたけど、後輩と接してゆくときのお手本、人としてのお手本を示していただいたように思います。そのような雰囲気は、研究科のすごく大事な部分になっているのではないでしょうか。その後、長坂先生が2013年着任ですか。

長坂／私が着任した時期は研究科の創業期を終えた頃で、世間ではソーシャルデザインやコミュニティデザインといった言葉が一般に飛び交っていました。そのなかで、率直に申し上げますと、最初は「社会デザイン」という言葉にピンとこなかったんですね。でも、その後、中村先生はじめ先生方とお話しさせていただく中で、私にとっては一番遠いと思っていた社会デザインは、割と自分と感性は近いものがあるんじゃないかな、と感じている今日この頃です。現代社会のさまざまな課題は複雑で一つの学問領域だけでは解決できませんね。私のバックグラウンドのリスク学もそうなのですが、学際的、領域横断的な形で知を組み替えて、新しい価値を創造して、課題解決に向かっていくという考え方方に立っています。社会デザインとリスク学ってカクチャードが似ていると感じられたので、今はこの21世紀社会デザイン研究科は私としては非常に幸せな空間になっております。

大熊／先ほどからお話を聞いていて、改めて思うのは、長坂先生の「幸せな空間」という言葉がすごく象徴的で、customer satisfactionではなく、employee satisfactionなのだと。やっぱり、私たち教員はemployeeですから、employeeが満足しないと、学生たちも満足できない。この考え方って、この研究科にもそのまま当てはまるのだなと実感しました。一方で、私たちがある程度満足をしているだけに、customer側の学生が不満を持つことがないよう、私たちのsatisfactionを学生と共有できるような形にならいいなと思います。

それから、いま改めて思うのは、この21世紀社会デザイン研究科は、研究科の形態も21世紀型だということですね。先生方の風通しもいいですし、学生が他の研究室に行っても、先生が怒ったりもしないですし。2015年に私が着任した時点ですでに、フラットな、

みんなが意見を出し合える雰囲気でした。そうした横のつながりがあるからこそ、こうした座談もできるわけですね。私は学生に、「教員同士もそうだから、学生同士もそうやっていきましょうね」と話をしています。

「これから」に向けたメッセージ

司会／今までのお話から、21世紀社会デザイン研究科は、当初から今のような組織・空間だったわけではなかったということがよく分かりました。先生たちが社会をデザインしつつ、ある意味で、本研究科のこともデザインされてきた結果、今があるのでなと思います。そのうえで、本研究科の「これから」について、先生方のお考えをお聞かせ下さい。

中村／当初、この研究科は非営利組織やサードセクターの組織、活動の運営といったテーマに寄せた設定をしていて、そうした属性の院生が多かったんです。その後、現在のように色々な属性の方が増えてきたんですね。長坂先生もおっしゃったように、社会デザインって、色々なものを飲み込む融通無得なところがあって、それがやはり良かったんですね、何か面白いものが生まれるかもしれない、と。私たちのメッセージの一つは、そうした雰囲気を、ぜひ今後にもつなげていっていただきたいということです。もちろん、論文としての質は押さえたうえでという前提ですが。そのうえで、院生たちが持っている、漠然としているけど化けるかもしれない、そうしたテーマ性の中から、「もう少し線を先に延ばすと、こういうふうになるんじゃないかな」という部分と一緒に作れるような、その意味での緩やかさは、研究科の良い面だと思うので、今後も伸ばしていっていただければと。

それから、この研究科で、私は新しいことにいっぱいチャレンジしているので、当然いっぱい失敗もしています。大変なんだけど、リスクガバナンスの専門家の先生もいらっしゃいますから、失敗を恐れずに、でももちろん失敗を想定しつつ、「この時代だったらここに踏み出さなきゃ」的な部分にぜひ取り組んでいただけるといいなと。そこもやっぱり、この研究科の良さだと思うので。

最後に、2015年の「Social Designer」の巻頭インタビューで、栗原彬先生が、「広い意味での運動としての21世紀社会デザイン研究科に立ち戻ってほしい」と仰っていました。もちろんそれは現状が駄目だということじゃないんだけど、「そのことを忘れないでやってほしい」と。それはすごく胸に響いた言葉でした。私はこの研究科を、研究機関だけれど、広い意味での運動だとも思っていて。そういうムーブメントが修了生や在学生に広がっていって、そこから色々な意味で社会を変えるということにつながる研究科であり続けてほしいなと思います。

萩原／コロナ禍が、「学ぶ」とはどういうことなのか、大学院の役割とは何なのかを、改めて再認識させてくれたなと思います。今までも、なんとか遠隔の授業展開をしてゆきたいという思いがあったのですが、図らずも、それを押し出していかざるをえない状況になってしまった。それが、いま中村先生もおっしゃった、「チャレンジしていくこと」の重要性をもう一度、思い出させてくれたように思います。いま、本



萩原 なつ子 教授

研究科には、沖縄在住の学生もいます。これをきっかけに、いろんなことが起き始める、いや、起こせるという可能性が広がってきたのかなと感じますね。やはり私たちはチャレンジャーで、そうした意味で、栗原先生の言葉も、私たちに希望を持たせてくれますよね。ある種のムーブメントを作ってゆく、そうした発信者としての21世紀社会デザイン研究科であってほしいなと、願っています。

さらなるチャレンジへ

長坂／これまで21世紀社会デザイン研究科は、東京池袋という中心性のなかでの学びを提供してきましたが、アフターコロナ、Withコロナの社会では、リモート環境で地方とつながって共に学んでゆくにはどうすればよいのかを、一緒に考えて、実践してゆきたいなと思っています。

長／MSDAという英語授業のコースが新設されます。主に留学生向けのコースですが、研究科が課題先進国の日本として積み上げてきた色々な知見を、途上国でそうした課題のなかにいる人たちに、英語で発信できる状況になっていければいいなと思います。研究科の蓄積は立教大学の蓄積もあり、そのなかには日本の蓄積になっている部分もあるはずです。もちろん本研究科が日本全体を代表するわけもないのですが、それでも、課題のかなりの部分はカバーできているのではないかと思いますので、今後はそのあたりにも力を入れていきたいですね。

大熊／アフターコロナにかかる話ですと、学生たちにとっても、リモートで参加できる意義はすごく大きいと思います。私の授業でも、お子さんを膝の上に乗せたまま授業に参加してくれる学生がけっこういらっしゃって、そうした子育てや介護をされている方が授業を受けるなど、新しい実践の形が出てきていますよね。これから教員も、全員が東京に住んでいなくてもよいと思うんです。色々な所に住みながら、たまに集まってという感じで、住んでいる場所の多様性もできてくるんじゃないかなと。そうであれば、教員が地方に住みながら、その場所に根ざした研究ができると……萩原先生、これ、何ていうんでしたっけ。

萩原／ステイ型ですね。

大熊／そうでした、ステイ型。ビジット型じゃなくて。そういう形もありなんだなと感じます。この座談会もオンラインでできているわけですから、教員である私たちの仕事のあり方についても、新しいムーブメントを作ってゆけるとよいですね。



大迫由美子さん
(おおさこ ゆみこ)

人材プロデュース会社の研修講師、コンサルタント会社のコンサルティングサポート・人材育成に携わる。OSTと出会い活用と実践者育成を行う。地元の公共施設新設に伴い、センター長に就任、現在7年目。萩原ゼミ所属。

大切な時間と学び

緑の美しい7月のキャンパス内、ゼミ仲間とお茶を飲んで少し語らう時間を作りたことが嬉しくて、いまこれを書いています。遠方住の私は入学して以来初の貴重な時間です。

COVID-19感染の収束が見込めない状況で、このまま卒業を迎えるのではないか、という思いが度々頭をよぎります。制限された環境では残念なことは確かに多く、よぎる思いはそろそろ現実味を帯びてきました。

とはいって、この状況だから可能になったことも少なくありません。ゼミ仲間とのわざかな時間を「特別で嬉しい」と思う感性は制限があるからこそです。「学びを止めない」取組みのもと一早く始まったオンライン授業では、仕事と学びの両立を容易にしてくれました。当初、先生方も学生もアクシデントや戸惑い満載だったことは良い思い出です。

私は「まちづくりに果たす活動拠点施設の役割」について研究を進めています。1年目は仕事で関わっている分野の授業を限なく履修していました。考え方方が180度変わった印象深い授業、思いもしない発見や考え方がすばらしくて感嘆する事例にも出会えました。それほど魅力ある授業が多いのです。

さて、順調にいけば卒業まであと半年となります。贅沢な学びを、僅かながらも社会へ還元できるよう修論作成に臨んでいきたいと思っています。



張孫健さん
(チョウ ソンケン)

中国からの留学生。立教大学経営学部から本研究科。データの利活用にあたってのプライバシー意識を中心として日本におけるモバイル決済の普及について研究中。2022年の春から某総合商社に新卒入社予定。博士課程前期2年。亀井ゼミ所属。

他の学生さんも私の先生だ

私は大学院に進学したきっかけは、学部の卒業研究で、モバイル決済が中国の経済に対する影響でした。中国において、モバイル決済がほんのわずかの時間で普及し、中国人の生活にとって当たり前の存在となった一方で、なぜ日本ではまだ普及していないのか、この疑問が湧きました。これを機に大学院で研究を続けることを決め、どの大学院に進学すれば良いのかわからないうちに、亀井先生に出会いました。私は亀井先生の知識の深さに感銘を受け、母校でもあるため、本研究科に進学しました。

社会人が多く、各属性の方がいらっしゃるのは本研究科の特徴でした。ストレートマスターの私は、「指導教授だけでなく、他の学生さんも私の先生だ」というマインドで日々の講義を受けています。各分野の方々との交流で、視野が広がり、多くのことを学べました。研究だけでなく、就活のことについても、周りの方から大変お世話になりました。私は、コロナ×文系院生×外国人という極めて不利な状況から納得できる内定を手にいたることは、亀井先生と他の方々から「君は少しでも疑問と思ったことを解消するまでやり遂げる人で、君の研究はその証明だ。それを売りとして就活しない」の一言のおかげです。その後、私は最終面接5連敗から一転、4社から内々定を頂いて、無事に就活を終えました。これから私は、最後の学生生活を満喫しながら、完璧な研究を仕上げたいと思います。



馬目佳弘さん
(まのめ よしひろ)

大学卒業後、自動車メーカー、外資系企業で海外勤務、マーケティング、新規事業立ち上げや事業部統括に従事。何を人生の土台にしたいか、60歳以降の人生設計を再構築するために入学。博士課程前期2年。中村ゼミ所属。

モヤモヤを肯定しながら

以前に立教のRSSCのウェブページに掲載されていた立花隆先生の「60代は人生のゴールデン・エイジ」という言葉と、リンダ・グラットン著の『LIFE SHIFT』を読んだことが私がこの研究科で学ぼうと考えた動機です。

そしてコロナ禍の中で入学し、否応なくオンライン授業が始まりました。Zoomの退出ボタンを押してしまえば先生の教えや仲間と共有した学びの時間が一瞬で絶たれてしまうような物足りなさ、さらに研究や学びを通じた新しい人間関係づくりの期待も弱まり、この状況でここに居ることの存在意義を考えM1の秋頃まで常にモヤモヤした気持ちを抱いていました。

講義を通じて「Negative Capability」という言葉と出会ったのはそんな時でした。答えの出ない対処のしようのない事態に耐える力を言い、なんでもかんでも解決しようとすることが賢さではないということ、その言葉は新鮮な共感とともに私の中に浸透しました。

私たちは、子供の頃から正解のある問題に取り組み、社会に出て仕事においても迅速で正確な成果や成長を常に求められ、それに応えようと努力してきました。先の見えない時、解決策がわからない時、宙ぶらりんの状態に一旦留まってみる。この言葉を頭の傍らに置き、モヤモヤを肯定しながら現在は目の前の課題である自身の修士論文に取り組んでいます。



岸川詩野さん
(きしかわ しの)

2021年春に武蔵大学を卒業。小6の時に東日本大震災を埼玉県で経験。岩手県のボランティアに従事し「防災」に関心を持つ。現在は、教育機関での映像を活用した防災教育を研究中。博士課程前期1年。宮本ゼミ所属。

当時の苦悩を今の学びに

2011年3月11日14時46分、東日本大震災が発生。私は埼玉県の小学校6年生で6時間目の授業中だった。大きな揺れを感じた直後、避難訓練で学んだことを活かして一斉に校庭に逃げたが、問題はその後だった。親の勤務地の問題で帰宅が難しく一人で不安な夜を過ごした友達もいて、学校で発災したことしか想定がされていない防災教育に改善の必要性を感じた。同月末には、当時所属していたボーイスカウトを介して岩手県にボランティアに向かうも、自分の支援に限界を感じやるせなさが残る。

この2つの出来事が重なったことで「私に何ができるのか…」と思い悩んだ。学部時代には、災害関連のアーカイブ資料の収集・活用の事例研究を行い、この研究科に「防災」と「アーカイブ」を専門とした先生がいらっしゃると知って進学を希望した。今は、教育機関での防災教育に過去の災害の映像資料を活用することによる効果を研究している。

——入学して早4ヶ月。大学院では「問い合わせ」と「対話」が重視されていることに気づいた。学友の年齢も20~60代であり、キャリア、研究対象も十人十色。論じるテーマによっては、先生よりも学生の方が詳しいなんてこともザラにある。毎日の授業での対話が私にとって大事な社会勉強になっている。

地方は学びを活かせる 可能性で溢れている



2018年卒
高澤 千絵 さん
(たかざわ ちえ)

石川県出身。外食、化粧品業界等で商品企画や宣伝販促、物流管理に携わる。研究科での学びから持続可能な地域づくりへの関心が高まり、大学院修了の翌年、東京から能登にUターン。2018年3月博士課程前期課程修了。

社会デザイン学の舟に乗り、興味と好奇心の波に揺られ辿り着いたのは、人生の半分以上に渡り生活の拠点だった東京を離れ石川県に戻るという決断でした。大好きな故郷、能登地域が消滅することなく持続していくために自分の経験や知識を活かせたら嬉しいし、今ならきっと役立てる。想いを行動に移せたのは研究科での学びと出会った方々のお陰です。

“地方は社会デザインを活かせる可能性で溢れている”とは意外かもしれません、移住から2年が過ぎた今の感想です。能登に惚れ込み移住してきた人々や若い世代、高齢になつても元気で働いている多くの人々と出会い、そんな人々との繋がりから、私自身、これまでの社会人生活でも経験できなかつた豊かな学びと面白い仕事やチャレンジの機会が得られています。困難はありますが、自分がやっている事でこの先の地域や自分を含む地域に住む人々の未来を拓きたいという想いが原動力になっています。

地域の観光協会事務局長を経て、私は現在、能登半島での

サステナブルな観光推進や魅力的な体験コンテンツ開発、金沢大学での予防医学に関わる研究員職、能登の里山里海の保全や文化継承などを目指すNPO法人の理事職など複数の名刺を持つポートフォリオワーカーとして働いています。観光、予防医学、地域の暮らしは別々に見えて、実は個々に持続的な地域づくりにとって大事な要素です。能登で進むSDGsラボやワーケーション拠点整備、ドローン活用や自然体験、新たなモビリティの実証実験など先進的な取組みは、地域の可能性を広げる一方で高齢者と若者、リテラシーの有無など分断をもたらしかねません。それを防ぐのに社会デザインの視点は大いに役立ち、レジリエンスを高めるネットワークの網として自分が関わる意義もあると思います。

今後、地方でも社会デザインを学んだ私たちが活躍できる機会は様々な場で増えてくるでしょう。さあ、一緒に社会デザインの舟で漕ぎ出しましょう！

学びと実践の 21世紀社会デザイン研究科



2021年卒
杉井 俊文 さん
(すぎい としふみ)

税理士。大手税理士事務所にて、事業承継や相続対策などの専門分野に従事したのち、杉井俊文税理士事務所を開業。ソーシャルでサステナブルな税理士を目指したサービスを展開している。2021年3月博士課程前期課程修了。

何年か前に、大廃業時代がやってきた！ というような内容の書籍を、税理士の視点から執筆する機会に恵まれ、廃業と事業承継に関する税務の専門書を出版した。しかし、同時に、廃業や事業承継は、税務上の知識・技術だけでは乗り越えられない社会的課題なのではないかとも考えるようになった。そんな時に出会ったのが、21世紀社会デザイン研究科である。

この大学院での学びは、自分の専門領域における専門性をさらに深掘りするのではなく、広い視野を持つことに役立った。今まで知りもしなかった分野に精通した先生方や、自分とは全く異なる経験や考え方を持った仲間たちとの交流は、大きな衝撃であった。通常の生活では接することは難しいであろう、異なる職業や世代の人々の考え方や、斬新なアイデアに触れるることは貴重な経験であった。講義を受け、皆と話をするたびに、新しい実践のアイデアが思い浮かんだ。税理士などの専門家は、職務上の専門知識をひたすら追求する傾向があるが、それでは視野が狭まっ

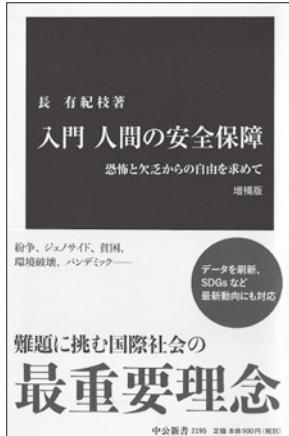
てしまう。一方、視野が広がると、専門性の獲得にもより良い影響を与えるのではないかという事が分かった。

21世紀社会デザイン研究科で大切なことは、学んだことを実践することである。私の場合は、大学院の卒業とともに、今まで勤めていた税理士事務所から独立し、個人事務所を開業するという決断をした。既存の税理士の枠にとらわれない、社会デザインの特色が強い事務所にしたいと考えている。今までの専門分野である事業承継や相続といったテーマについても、社会的側面を考慮しつつ、課題解決できるようなサービスを提供しようと取り組んでいる。

また、大学院で取り組んだ研究内容である、事業承継問題については、引き続き、社会デザイン研究所の研究員として研究を継続している。これからも学びと実践を一緒にを行い、社会に役立つ事業を考えていきたいと思う。

入門 人間の安全保障 増補版

恐怖と欠乏からの自由を求めて



「人間の安全保障(human security)」は、人間を中心とした人間中心型の安全保障として、従来の国家の安全保障(national security)に対峙する概念として登場しました。インド出身の経済学者アマルティア・センが唱えた「ケイパビリティ(潜在能力)論」を下敷きに、国連開発計画が1994年の『人間開発報告書』の中で提唱した概念です。

2012年に『入門 人間の安全保障 恐怖と欠乏からの自由を求めて』と題した新書を上梓してから8年、この度データを刷新し、新章を加えた増補改訂版を出版しました。『入門』という書名が示すとおり、教科書的な要素を含みますが、それには理由があります。斬新なスタイルの歌舞伎に挑戦し続けた第18代中村勘三郎さんの言葉をお借りするなら「型があるから型を破れる。型を踏まえないまま破ろうとすると形無しになる」からです。

「人間の安全保障」を阻害する内外の様々な課題を解決していくこうとしたら、まさに型破りな方法も必要です。しかし、型、つまり国際政治の基礎や、現在の国際社会の大前提のルールである国連憲章や安全保障理事会の機能、そしてPKOの限界などを知らずに、議論するとせっかくの思いとは裏腹に見当はずれの議論になります。それはまるでサッカーのルールを学ばずに、選手や審判に文句を言うようなものです。

地球規模課題が山積し、複雑になっている現在だからこそ、これらのことに関心を持つ人には、是非、型を学び、その上で、こうした型やルールを凌駕する活動や解決策をしてほしい、そんな願いをこめて書いた増補版です。

(長有紀枝)

日本の新時代ビジョン 「せめぎあいの時代」を 生き抜く橙円型社会へ



鹿島平和研究所・
PHP総研(編)
PHP新書・408ページ
2020年10月発行
定価:1,210円(税込)

本書は、独立した政策シンクタンクである鹿島平和研究所とPHP総研の共同研究プロジェクトの成果です。亀井は、三部構成第一部(問題意識・時代認識)と第三部(結論)の執筆、第二部(17人のゲストスピーカーを招いた研究会の対話)の企画を担当しました。

2018年春に研究会を立ち上げ、新たな時代に向かう、これから日本のが、いかなる時代認識の下でどんな社会を目指すのか、そして、バブル崩壊後、改革の必要性が常に叫ばれながら、戦後の成功モデルから脱することができなかった日本が、いかに時代に合った自己変革を遂げられるのか、について真剣な検討を重ねました。とりまとめの時期に遭遇したコロナ禍も、時代の変化を加速させる要素と位置付けました。

現代は「せめぎあいの時代」にあります。グローバル化と国家の台頭、工業化とデジタル化といった対立する概念がぶつかり合い、影響し合う社会です。一人ひとりが変化そのものに向き合い続ける必要があります。

時代の変化に向き合う最先端の取組みの担い手との対話を通じて見えてきたのは、鎖国化の自己満足や内輪の論理に閉じたピラミッドに陥らず、世界を踏まえた相対化を進め、適材適所の開かれたチームを作ることの大切さです。目前の社会課題を取り上げ、時代に適合した戦略を探り、愚直に努力徹底を続ける人は、やるべきことが明確なので、みんな、ポジティブです。

ここに書いたことは一部のリーダーだけの問題ではありません。一人ひとりが時代に向き合うヒントを見つけていたなければうれしいかぎりです。

(龜井善太郎)

2021年9月MSDAコース(Master of Social Development and Administration Course)がスタートします

～国際社会で活躍できる高度専門職業人をめざして～

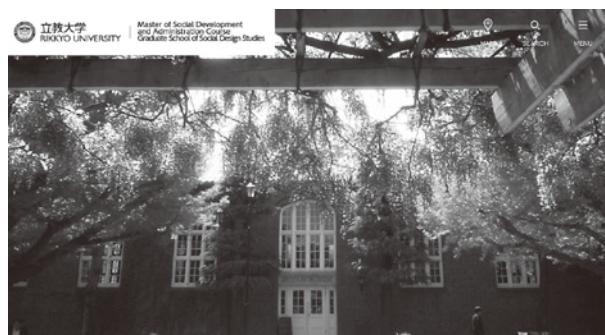
2021年9月、21世紀社会デザイン研究科内に、英語による「公共・社会デザイン学コース (Master of Social Development and Administration Course: MSDA)」が開設されます。全ての講義・論文指導が英語で実施される本コースでは、現役の行政官、国際機関やNGOなど様々な分野で国際的に活躍できる高度専門職業人の育成をめざしています。

第1期生となる2021年9月入学者は7名の予定で、全員が海外からの留学生となります。そのうち5名はJICA奨学金付き留学制度を利用する学生(アフリカ4名、太平洋島嶼国1名)であり、2名は一般入試を突破した学生(中国2名)です。

本コース科目は、論文作成法のほか、哲学、組織論、人材育成論を含む8科目で構成される選択科目群1、持続可能な開発目標(SDGs)関連科目、公共経営学、経済学で構成される選択科目群2、修士論文指導を行う選択必修科目群の3つで構成されています。

在学生は、1年次では、公共・社会デザイン学に関連する選択科目群1より幅広い科目を履修し、基礎知識の修得と論理的思考を深め、2年次では、選択科目群2よりSDGsに関連する専門性の高い分野から、学生の関心に応じた科目を履修することにより、学生自身の研究テーマと深く関連付け、修士論文の完成を目指します。

また海外提携校と立教大学の学位を同時に取ることができるダブルディグリー・プログラムの開始も検討しています。



MSDAコースHPのTOPページ

Graduation School of Social Design Studies
Master of Social Development and Administration Course (MSDA)

Course Code	Course Name	開講学期	Credits	Year
Elective Required Courses (4 credits)				
VP111	Master's Thesis Supervision 1	秋学期	2	1
VP121	Master's Thesis Supervision 2	春学期	2	1
VP131	Master's Thesis Supervision 3	秋学期	2	2
VP141	Master's Thesis Supervision 4	春学期	2	2
Elective Courses 1 (10 Credits and over required)				
VP201	Qualitative Research Methods	春学期	2	1・2
VP202	Philosophy and Ethics	春学期	2	1・2
VP203	Corporate Social Responsibilities	秋学期	2	1・2
VP204	Organization Theories	春学期	2	1・2
VP205	Cooperation with National and Transnational Civil Society Organizations	春学期	2	1・2
VP206	Social Development	秋学期	2	1・2
VP207	Human Resource Development	春学期	2	1・2
VP208	Public Administration	秋学期	2	1・2
VP209	Research Methodology	秋学期	2	1・2
Elective Courses 2 (16 Credits and over required)				
SDGs				
VP301	Disaster Risk Management	秋学期	2	1・2
VP302	SDGs and Environment	春学期	2	1・2
VP303	Peace, Security and Justice	春学期	2	1・2
VP304	Gender Equalities	秋学期	2	1・2
VP305	Sustainable Education	秋学期	2	1・2
VP306	Inclusion	春学期	2	1・2
VP307	Population, Migration and Refugee Issues	春学期	2	1・2
VP308	Quantitative Methods for Policy Analysis	春学期	2	1・2
Public Management				
VP351	Public Management	春学期	2	1・2
VP352	Project Cycle Management	春学期	2	1・2
VP353	Public Private Partnership	春学期	2	1・2
VP354	Local Government and Public Services	秋学期	2	1・2
VP355	Public Policy	秋学期	2	1・2
VP356	Security Sector Analysis and Management	春学期	2	1・2
Economics				
VP371	Inequality and Poverty	春学期	2	1・2
VP372	Development Planning	春学期	2	1・2
VP373	Environmental Economics and Policy Analysis	秋学期他	2	1・2
Optional Courses				
VP411	Advanced Seminar1	秋学期	2	1・2
VP421	Advanced Seminar2	春学期	2	1・2

21世紀社会デザイン研究科 在学生のみなさんへ

MSDAコース科目を履修することができます。
但し修了要件単位には含まれません。

立教大学社会デザイン研究所 大和ハウス工業株式会社寄付講座 ポストコロナの社会と空間の変化をデザインから考える

主催 社会デザイン研究所 共催 21世紀社会デザイン研究科 協賛 大和ハウス工業株式会社

当講座は今年4年目を迎えます。昨年度までは全学部の学生が受講可能な講義として立教大学コラボレーション科目『文化の居場所を考える』講座を開講し、2年間で400名弱の方に受講していただきました。また、他大学の建築都市計画系学生をはじめ全国各地の大学生・院生を対象に合宿型ワークショップ『Design Camp』や、それらの基礎となる研究会、シンポジウム、講演会等を開催するとともに、『ビルディングタイプ学 入門』の書籍化を実現することができました。(1冊目2020年5月刊行、2冊目現在編集出版準備中)

昨年度は新型コロナウイルス拡大のために、当講座はオンラインでの開催となりましたが、だからこそ全国各地の方々に聴講していただけました。

2018年度に開講してから2020年度までの3年間の成果と課題をふまえ、また新型コロナウイルスの危機とそれによって生まれた様々な社会課題解決に向か、今年度はこれまでとは少々色を変えた取り組みをしていく予定です。

秋以降には昨年度までと同様に、一般の方や他大学の学生の方もご参加していただけるような研究会を定期的に開催する予定です。今年度は建築・工学系ではない方にも関心を持っていただけるテーマにしたいと考えていますので、ぜひご参加ください。

昨年来、私達は新型コロナウイルスによって今までにない環境の変化を強いられてきました。当講座の取組において、新型コロナウイルスによって生じたあるいはそれによって加速した変化を意識し、社会や暮らしがどのように変わっていくのかについて受講生のみなさんと共に向き合う時間としたいと考えています。



中村陽一・高宮知数・
五十嵐太郎・楢橋修／著
誠文堂新光社
A5判／256ページ／
2020年5月発行
定価:3,520円(税込)

進学相談会のご案内

2021年度 第3回 2021年11月20日(土)13:30～16:30(2021年度最終回)

詳細は本研究科公式サイトでお知らせします。

2022年度の日程は、2022年4月以降に本研究科公式サイトでお知らせします。

入学試験概略（2022年度（2022年4月1日入学者対象））

博士課程前期課程

- 入学定員 50名
- 入学試験実施時期 秋季と春季の2回
- 対象 出願資格を有する者、もしくは本大学院において、大学を卒業した者と同等以上の学力があると認められた者。
(注)後者の出願資格を得るために、出願に先立ち、出願資格審査を受ける必要があります。
- 試験区分 入試要項に掲載される内容をご覧ください。
- 選考方法 書類審査、筆記試験、口頭試問の成績を総合的に評価して行います。

※入試要項は6月上旬頃(秋季実施分)と11月上旬頃(春季実施分)に公開されます。

博士課程後期課程

- 入学定員 5名
- 入学試験実施時期 春季のみ
- その他 出願資格は前期課程と異なりますので、入試要項に掲載される内容をよくお読みください。

※入試要項は11月上旬頃に公開されます。

発行／
立教大学大学院
21世紀社会デザイン研究科
編集長／萩原 なつ子
編集担当／中森 弘樹
発行日／2021年9月16日
〒171-8501
東京都豊島区西池袋3-34-1

More Information

21世紀社会デザイン研究科では、講演会やイベントの情報をおホームページでお知らせしております。

21世紀社会デザイン研究科
ホームページ
<https://sds.rikkyo.ac.jp/>



21世紀社会デザイン研究科
Facebook
<https://www.facebook.com/21csd/>



研究科・入試に関するお問い合わせ

立教大学独立研究科事務室 cde-ad@rikkyo.ac.jp